貞丈雜記　七之上

ワ 3
6592
13

門ウ3
號6592
13

昭和十九年四月五日
故三上參次先生紀念
三上參次寄贈

貞丈雜記卷之七

膳部之部目録

一合子之事
一折之事
一衡重之事
一木具之事
一折敷
一加んすのけ
一平折敷 角不切 側折敷
一煙草盆之事
一土器之事 八ケ条
一三方四方之事
一足付
一片木
一角小角 図
一三方四方を用る人品之事

一菓子盆之事
一ふち高之事
一重箱之事
一箸の臺 図
一饗之膳
一三峯尖 二ヶ条
一盛形之図
一添てうし之
一飯櫃之事
一白木膳之事
一ちやぶの事
一むき折敷
一皿さゝ
一甲立之事 二ヶ条 図
一高坏之事
一行器之事
一市ぞん立
一飯匕之事
一匙之事
一破子さゝえの事
一塗椀之事
一ぬり茶の事
一土器之代碗器用る事
一活鯉取扱之事
一心葉の事

酒盃之部

一献之事
一二ッ盃之事
一おゞ元くそへの事
一高盤之事
一ゆゝしきの事
一懸盤の事
一藻分塩分之事
一様器之事
一塗盃之事
一婚禮盃の事
一重家盃先後之事

一世このゝ
一懸利の事
一銚子提子碟形付ゝ
一祝言之瓶子こゝ事　二ヶ条
一銚子こゝ柄包むゝ
一筒こゝ酒
一さゝ九こんのゝ
一さゝ榑こゝ　図
一押物こゝ
一三ッ星五ッ星こゝ
一酒の中殘るゝ
一柳樽の事　二ヶ条
一瓶子置様こゝ
一銚子提子ゝ山松橘付ゝ
一瓶子片口両口こゝ
一鳥素こゝ　二ヶ条
一法通ゝのゝ
一内ぐゝり出瓶こゝ
一盃臺
一かるこけ物

一折の物
一銚子の柄ゝある星のゝ
一勸盃こゝ事
一盃こゝ
一削り花こゝ事
一拳固こゝ事
一太鼓摺こゝ事
一食籠物
一殿中臣一献
一白酒黒酒こゝ
一さい越所こゝ事
一銚子蓋なきゝ
一酒厩の前の臣一献
一唐瓶子こゝ事

輿類之部

一輿四品有こゝ事
一棟立輿こゝ事　図

一四方輿之事　図
一みせきぬの事
一輿のもとゆいの事
一今世ちぐのえぎりのもの
一籠の輿のもの
一車并輿乗座りの事
一こしらえのもの
一ちりくまんの事
一塵取の事　図

以上

一輿の下簾　図
一女輿金物之次第
一さて遊の事
一今世家物駕籠のもの
一家物とは
一黄色輿之事
一輿墨之事
一檳榔毛車之事

貞丈雜記巻之七

伊勢貞友
千賀春城　同
岡田光大　校
門人

膳部之部

此部飲食之部ト合セ見ベシ庖丁方ノ事モ入

一合子（ガウシ）とも合器（ゴウキ）とも云ハ椀の事ニ対とゆゑを合せ数椀の名ニ合器を五器と書て器〻〻と云ハ乃五也と云説ハ中あやまりニ平皿ハ五〻〻と云ハ誤古ハ器〻〻ん汁ハ器〻〻ん汁ハ器〻〻平皿ハ平〻〻ハ平〻〻ハ平〻〻

今の平さうつぎさうの廻りは細き筋を言く付るハうげ物
まうつる綫入さるをまゝ称くるなり（このうとハ細き輪を入るゝ）こゝ言と云物を
ぬうらけのわるうげ物の輪を蓋すゝ（これをまうきとゝ）る形（形元）をまゝ称くる物なり
奉式の膳部ハ皆白木すて食物ハうつけうもたてうげ物の
上ふせぬうらけをもぬる也食物の形よりて白木乃うげ
物すもこれなり

一 毎年盆と云物京都将軍の時代ハ南蠻（ナンバン）國（コク）より渡りしとゝそれ故旧記ハ煙草盆のなゝ今の世
乃なゝハしもて貴人の席前てハ煙草を吸ふを禁とする
也ある事なり

文明十三年三月廿七日御方店所能有貴殿ヨリ御進上店折三合六寸六角云ゝ日ゝ記六角二折うげうるもあり

折（ヲリ）と云ハ木を折うげて箱ようる物折と云是を折ようあるを折
付る事ハあゝ折ヶ合せて蓋をして蓋ふ足を付る也ふうる
打（タヽ）すて折付るなゝ蓋ようるふうの上へ水引をかけて結ぶゝ
蜂川記云ハ折ハ三献めより五献めより糸ゆ可結ハ云ハ献数
折き時ハ二献めとりも糸ひきそくの物ハ箸ハすうるぶハ折の
内ようるうる物ゝぞ箸をもゝざるゝきそくの物ハきそくを以て人ようる事なゝ又物神ようすうる
ゆるもいたゞりをバうげすてきゝいて持出ゆゝ云ゝ出ぶりとハ
水引すて折を結ぶると云ゝ今時折と云ハ折ようるふ足を打付
ふうをも打すて高め削（ケズ）て花をふうの上ようさもゝ是ハ古ハ折と
いうぞ櫃（ヒツ）物（モノ）と云也折ハ金らん殷ようゝ門ハ云ぞ入る事進物の部ようる記也 今時折一合と云ふ紙

ヲリヒツモノ折櫃物トヅゞケテ云時ニハヲリウヅモノト云也

折ニ了乃事と心得る人有り あ事なり〻 打よ物きゝ〻 唐樋(タラヒツ)
あども 一合と云ハ一ツのるへすべて第数を ハ一合二合と云〻
土器(カハラケ) 品〻のるを小きをこぢうり 盃をつらけのるを小ぢうり大
ありを三ど入と云 三ど入より大るを大ぢうと云小ぢうふ 對
〻る名也さて又三ど入より大ぢう 以下三まハりぢ〻大きく
大ぢうは三まハり大るを五ど入と云 五ど入ぢう三まハるを大
るを七ど入と云 七ど入より九度入十一度入十三ど入十五ど 今ど
何も三廻るづゝ大きく十五度入より上ふ大るハかゝ五ど
入七ど入より上ハ〻大るハ酒りの時者をもりて出す時
用る〻 舊記ハかゝけ物と有ハ此事〻 前る云 盃をかゝけ

条〻聞書云三ゝの間ハふぢうへそなとらけを云又膳部の間ハてゝ不四と云ふぢうのるゝ

一 濱人藻芥云鍾(ショウキ)ハ イカウ二度入三度入置也然二近代間物五度入塞(ソク)鬼(ヒ)如種々土器今出来酒興盛故也

貞丈云武家ニテハ二度入ヲ忌也凶事三ツ盃三三度々酒ヲ入故十リ

のるを小ぢうと云ハ三度入の内ハ重る小き土器ある故なり
三度入ハ盃ハ用るのゝけ〻酒ハ盃ハ三度て入る故盃ハ
土器を三ど入と云大ぢうハ三度入の外ハ重るり大るを故大変(オホヘン)
と云五ど入ハ三ど入より大ぶ有て入と云七ど入と云も九度入
下も同〻るゝ三ど入五ど入ハ五ど入ハ三ど入と云るよハあるず
陸〻ハ大きくるゝ四三度入と云ハ本づきて名付る名なり
一そくびと云ハかけ式膳部記ハ大ぢうるゝ但そくびと云
かゝけ一の紙云〻貞衡云そくびと云ハかけ有大サ大ぢうろ
く程にのるを灰ぢうろく茶の間に用 有あどもるて出そく
一ひいの物と云ハかけあり大草殿お借書ハ云あいの物とハ三ど入

すり少石髪くゝ平うゝよりハふと〜おそ〜とハおさきゝ
ふと〜とい大きゝゝ

一盃いのうと云ゝゝけゝ風呂記ハ云法通寺の貴人の御前一召御酒ハ下をふ 盃 也

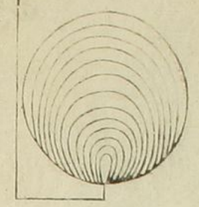
平高也北上記云へいのうと云石をきゝハゝけ云〜あいの物ハ
小きゝハゝけ也ふのきゝのゝけ〜条〜関書云ゝゝけのこ〜〜物を
記〜て平幸ハゝさぐりを〜てけづの物をまんぢうのゝゝむ
べ〜とゝゝ盃いゝゝハつぐふのきゝハゝけゝれを下弦を〜てうゝ
むけて〜ゝゝ上ハ五色の魚類を削りて〜ゝゝれハまんぢうの形ハ
高く茶〜神ハ供物をゝりて〜ゝるゝハゝけハ平賀本字ハ平篦ト書ク
小壺手壺と云ゝゝり平賀ハ〇ゝ此小壺ハ〇ゝ手壺ハ〇ゝ
此図ハ神道類名目抄ニアリ 此手壺といふゝ盃いゝゝ〜〜平高と出け

人唐記云魚道凝濁ト云又台記四節八座抄云凝濁云〜本名ギヤウダクト云

ども平壺ゝ〜小壺のゝくふのけれども強く深ゝゝず〜〜て
平き故平壺と云ゝゝ盃〜

一白ゝハゝけと云ハ白く焼ゝ今も京の深草焼土佐の尾土
焼ゝどふごゝをぬりゝゝめく白きゝゝけゝ

ゝさゝハゝけゝ引ゝハゝけゝもゝて凝濁どゝの土器ゝも云ハ酒をのゝそゝさを
見ゝゝさゝを出てゝる平人ハさゝゝ〜ハせずゝさゝハゝけゝ物一盃
ゝたすれハ随分ゝゝゝき人新出て酒をのむゝ旧記可
ゝゝり此ゝハゝけをゝさいれゝゝ常の土器〜替ゝゝ〜
ゝゝの物と云ハゝさゝハゝけゝ見ハ金箔ゝどゝて〜だゝ繪



如此所を公卿とあると云
供饗の事ヲ公卿ト書タル書モ有供饗
本字也

を書色どりする物く萬者記ハ云たりの物とやも云へ此
事く是ハ時の所ハ表（ハ不出物なれば女中むきなれば必おされば
一院けつりなる物なれば殿中なれども云云或ハ云ぬ物ハ
そうの物の器く云く是ハ漆ぬのを云
一土器のひねりとあの事所記ハ云かいけハ沙移りとめとて竪所
必筋ひの軍陳門出なるよひねりとめを前（あって酒のようぬ
物く云云そよ筋ありとハ赤ハ筋あるよあらず土器の底可
うづまきのめくなる筋あり所ときく窯ハ云前をひねりとめと云
一沈いきとハ衝重と書て三方四方供饗の物名く皆沈いき称
地上の臺と下の足とをつきたる物なるべしついきと称と云く

三方ハ穴をあけるを三方と云四方ハ穴をあけるを四方と云
穴をあけもあけきるを供饗と云時ハ品ハ何れも同し形なり
足付ハ衝重の類ハあらず
一三方四方の下ハあける穴を今ハ足あしと云古ハげんと云
と云げんとをあくるを上鶴名記ハ見（たりげん
ちあるとハ眼像と書て眼ハ目也目とハ何なるなく目の像
とハ事く引目猪の目なるく云目の字も皆穴の事なれ同意く
一木具と云ハ檜の木の白木なれ作るく臺も皆木具也
三方四方供饗も木具く称ハ今ハ足付のなる斗を木具と云
足付ヲ足打ヲ足打と云打ハ足を打付るなく足付の打ハ

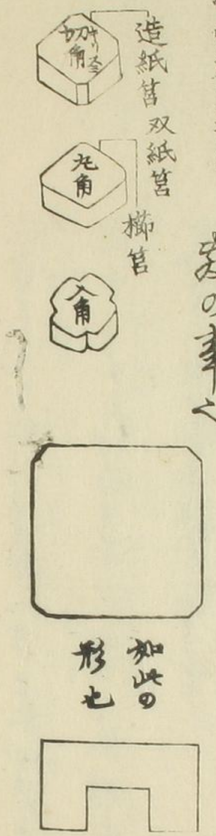
也以等を畧して足付足折もどと云

一折敷（フシキ）と云ハ足おきを云ふ足付のるを折敷といふ事もあり
足付の折敷ある故折敷とも云なり

一角ぎと云ハ板をうすく角ぎる侭けづるぎを作る折敷を云

一ぬんをうけ又ぬうけとも云ハ角ぎる板をぬんをうけて
うくしくけづるを作る折敷をうく

一角（カク）の折敷とも又角（カク）とむとうも云ハ四まこの角を切りる折
敷の事之



足の形ハ如此なり
折敷ハ如此の足付なるを
足付と云 今ハ足折と云

筥の角々名色々
有事此名
雅亮装束抄出

一小角（コカク）と長右の角の折敷を三寸四方あり〜うく中角ハ五寸
四方すあうく大角と云ハ八寸四方也是を八寸と云

一平折敷と云ハ四角のもどを切りさるく四角のまゝ也足ハ〜角
の折敷のごとく足付るるもあり〜用ゆ依角〜

一角切〜すと云ハ平折敷のるく東山殿年中行事ニ管領（クヒレイ）ニ
引渡角不切と云事あり不〜ハ凡そう

一そぐ折敷と云ハ角切〜ずして足ハ〜りもくさをきを云

一今時ハ年始ごと子堂位等官のいやしき者ハ盃殘三方
ハ乃ち風俗よりうり古ハ三方ハ平人の用る物ハ〜ぎ盃
ハ〜くの折敷又ハ角ぎるのせるく酌等能ハ主人老人の在所

一光院内府記云
盃四方三寸ノ一 大臣以上ハ四方大納言以下ハ三方也摂家ハ不依淺官自幼少於公家被用四方矣為一之人

雑記七

盃を持て出たる事南の折敷の奥ぎるを分たるとなり
是平人は三方を用ざる故なるべし　盃のこと作ず膳も
人の位を分て定法なり　秦〻問出る云公方様御家門跡大臣家
又は清華の大方の公家衆は三方を用ひ武家
角の打敷なを用ひ大臣家〻ぬ公家武家作法の時も此分なり
又云相伴の人すり膳の替る殿中にては公方様御家大臣門跡
法四方は郷は三方摂家大臣門跡渡御の時は武家の場合伴衆は
配膳も役奏にて殿上人はみな〻ひは武家の場合相伴の時は公方様
は和四方は家大中納言三方武家是分は配膳は供衆又長老
法お伴の時は公方様ともきはぬる折敷に桃もは長老も同の

上臈分人用細縁
殿上人四位五位公卿
参會之時三方勿論
也

○細縁ノ三方今ハ薄
縁ト云三方ノ方ヲ
ヒキクシル也
元来菓子ハ方ヲ
カニモ用ル本式也貴
順記云菓子盆
二菓子入ルハ略儀
也ト見エ古ヨリ菓子
盆アリ也

一　法配膳喝食寺院成の時の事人云〻是を以て平人三方を用る
事あやまりなるべし

一　菓子盆と云物古は菓子ハ方ヲ盛也方ヲ白木ありて
又まんぢうのんもどハ　やうかんぢうん　うんせうのれ　うう　けよもの　寺方ぢ
すてハまんぢうのんもどを挽よもの也菓子盆無近代の物

一　ちやづと云事京極大草紙にんの条さんバのおき所ちやづの中に
とありちやづとハ人〻盆の事人今も尾州家にハ菓子
盆の事をちやづといふなり

一　ちやづハ物ちやの折敷と云物に折敷のうちを言ふなり
菓子ものを言ふなり

物ちがさ一寸五分ばかりの角切角(スミキリカク)くゆるゝ柱(カツラ)を入る

一むぎ折敷と云ハひや麦ゝ麦をもる折敷又せいろうとも云ふ

云ふ

麩を椀又ハ皿よりもふく

一今の重箱といふ物ハ古のむぎ折敷を学びる物ゆへ古々重箱といふ物ハ菓子有あどの新者ハ皆折よりもるる形

猿楽のぢんざうと云狂言ハ宿坊(キヤウボウ)の重の内ゞ来りまし

と云ハ式狂言ハ室町殿の代ハ作りる狂言ハ有べ

ず後ハ作りる狂言ハ有べ

一瓜を来りするゆへ来りする条ゝ関書

重箱古ヨリアリシ也貞順色々之記ニ重箱ト云コアリ大永天文ノ比書シ書ヨリ室町殿ノ比アリシ物ナレ共表向ハ出サル物也又節用集ニモ重箱見ヘタリ

紫式部日記ニハさきゝ物あいはさらるゝ物をしの為い云く重盛集ニハ重しのあいあるおもしきのれもそなふ云ゝ

あどハ瓜ハうりうるさしゝハ楊枝のごとく成物ゝ串を刺

二三分ハ丸くけづる一方ハかどを成しめんをきる一ゝと三儀

一流ハ元ゝ

瓜ハウリト書一ゝ和名抄ウのめるく

倍ハフリと書ハのやまりく

一箸(ハシ)の墓と云ハ

の膳ハ必みしくるけの事ゝ七五三あどの膳をもて式正

箸の墓

耳ハくけ

箸の墓ハ

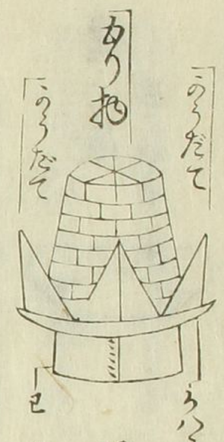
ゆるる形あり

一甲立(カウタテ)と云ハ七五三の膳をもて式正の儀ハ物を盛る小角

ハたゝけふどハ切り柱の廻るハ紙を折形をして有るゆ有

まかけの折りて
らけあごる甲立
をするハ柏り柏
のこれ長ざる
あるよしるるく
くびかさりまの
み用るるよあ
ずと知べし

抜の打形を甲立と云也折形ハ庖丁の家の流ゑよりて遠ゑ
是ハ本名ハ饗立ふれども りうだてといひあやまりて甲立と
書く打形名く何ふ柏く



甲立　甲立の形名と不し有
此数乃あと知る

一饗立を以て食柏の餅とする事ハ上古食柏を柏の葉ゑ盛
ゑるよりゑ柏の葉を表して紙を折てり柏をかざる事
一饗の膳と云ハ飯ゑ饗立をする也饗の膳と云く
一きとつきと云ハ食柏をかるふるけの下ゑ ことげあの輪を立てるを
云也はきと云ハ坏の字て土器茶碗などの形をまぐてはきと

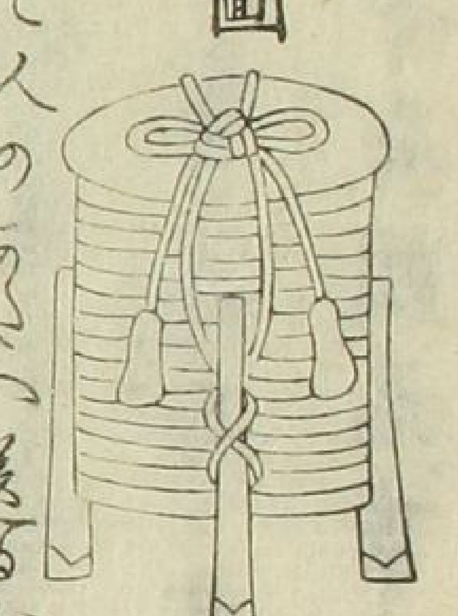
云也りうけの下ゑハ輪を立て坏を高くする加たのはきと
りうく大草流の書ゑ武三献の折敷ゑつきくと何るハ右の土器の
下ゑ ことげ物を置くる也今時 めゑる柏を本て作り
て高坏と云もうけの下にことげ柏の輪を立て言くしる
形をまゑびて作て出しるるり
一三峯尖ハりうけゑ宗五大双紙ゑ見えそう又三儀一統
ゑハ鏡子ゑ ありとあるとハ鏡子とハうゑの坏く
一三方膳と旧記ゑ書うるも何り三峯尖の事く

行器ノ圖包結記
ニテリ可見合

一行器を古き書ゑハ外居と書うるも何る東鑑三十四云或ハ
衝重外居等屋圖為事云〻江家次第二云大臣家大饗

之条〻外居一荷トアリ

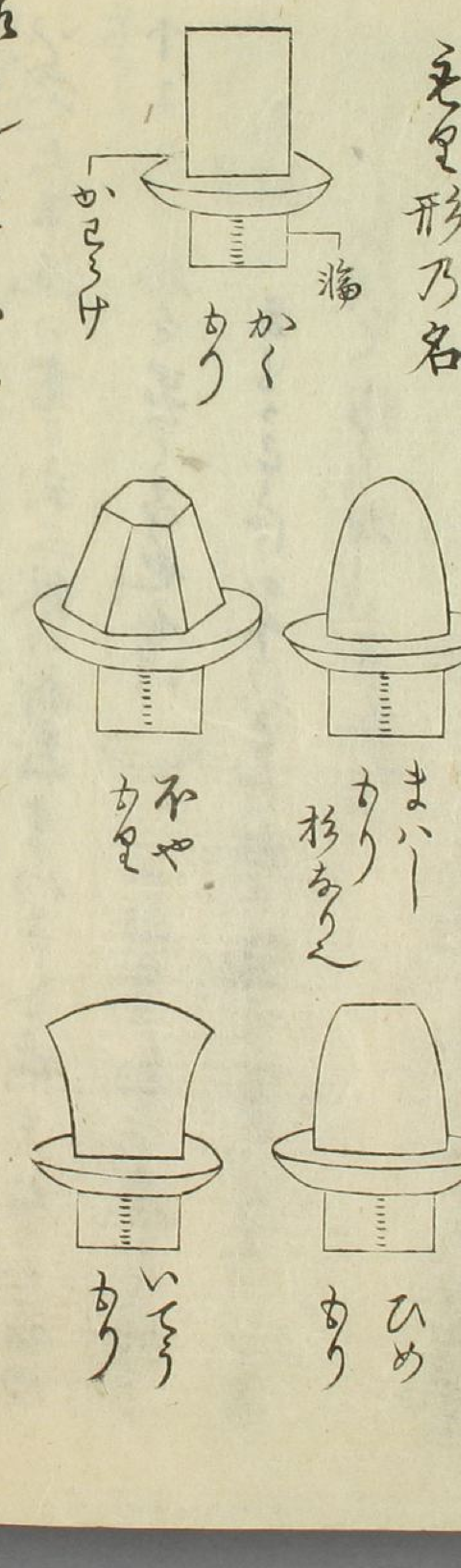
○行器之圖



紐を付けて人のもとへ送る器也又云古ハ足なき行器もなり又足たかのなるとふもあり足なきはたいしと足たかきものなるをほかゐと云又云行器くろぬり又まき絵なとも有り大小不定云〻

包結記を以て考ふるに此圖を補入せり同書に云行器ハ餅赤飯まんぢうの類をいれて食物を入るものなれハ必結めぶ

一 ほかゐ形乃名



おんハ盤也食盤ハ膳ノ了也

一 御だんとてハ臺なくて御膳をのせ居く臺のこと

一 御てうしたてと云ハ臺なくて御銚子ひさげをのせ置く臺なり幸也畠山式部少輔亭御成之記に御だんとて御てうしとてもあり與の臺くつくえなどのやうにして足を四本付る臺なる器し作り様作法とてハなしへりくれ

一 飯匙をすくもやくしれるをハいゐがいと云本也飯匕と書之匕ハさじとよむ字之いゐのひとりてと云事伊勢物語に見えたり

一 めしばちめしつぎなどと云ハ悪しいゐびつと云へし飯櫃と書なりいゐびつハ○の如なる形なる板細長く丸き物をいゐびつ形と云なり略してひつとも云

一 御とりまへと云事ハかわらけ物のこと 土器の大なるをさらなるをまて出すと今時許の物と云 北上記に云かわらけの物と申すより八御取まへとかへの能い

一規式の膳部は白木を用ひ何をも土器に盛るなれば是一度
切に用ひて再び移して後おこなひて捨てそれを二度用ひざるなり
これは神國の風俗にして清淨を尚ぶ故に神代はかくなり
ぐふもなくて食物をは柏の葉にうるまくされ稲葉を
ひいてとも云ふ此故くとや傳へ後世に至りて白木の膳土
器などを金銀のまくにして彩色をなすはおごりなり
にて白木十器を用ひる事を取りしるべしる者也

一破子（ハリゴ）さくれと云ふは白木にて折のごとく作りつぎあはせざるに
しる弁当笹にて形ばかりも四角三角にも扇形にも折り風
流なるもの多くなりてこれも同じ深さなる板にて方同
じくあるを以て子と名付くるなり故にまぬかれず白木
にて作り一度切るなり流しすはるくさくれと云ふ弁の筒の
酒を入て持て行を云書付を切てかを両方に置て上のか
ゝるあるをかけて酒を入れ弁は笹の葉の枝なるあさくれと云

一今時の漆椀（ヌリワン）の図はこれだうとて めしある物何にはこれ
の下は輪（ワ）を立てる形を作りて者に又つぶざうとて めしある
なる物あり又ひくさくとて めしある物あるはつぶざくに平ざう
と云物はひげ物の形をこれにして作りてまくの細き筋はひげ
物をいとくを入る形にくいとくとは和き物を云 親式の膳は食物を皆土器
にもり又物によりては白木のひげ物をもるなり土器の下は輪

を表也漆椀の具なども形をうつして作りなれば大なる
さゝら焼奥州などもある事も大なるハ二ケ盃を略
したる物へ

一飯を高盛にする事親式の時ハ土器に飯を多くハ二ケ盃
ますせざれバ飯少き故高盛にまゝ今時祝の時ハ椀に飯を高
盛可申候へ椀ハ深くして飯多く入る故椀にハ高盛する
に及ざるなり親式の膳ハ何もハ土器にあるべし土器のさき
物を食物多く入る故飯に限ず何もハ皆高盛有
之事也高盛と云ハ山なりに盛る事
椀にハ高く盛べし多く入

一箸ハ上古ハ木を尚角にして削て用ひ先ハ鉄或
今事無之宇治拾遺物語に云用鍾きゝの包丁ハ佐ぶんと
いひてすゝだをきりて朝なる刀ぬいてまゝを佐くゝ 包丁カモ朝ニイレタリ
右の如く上古ハ當座に削て先ハ丸きを用ひられ
ぬ故に後ハ次第に先ハ丸形を入あり宗五記に条々次第
草流にハまるばしのさきをでこのけず釘のやうなる形を箸の先に
ら入ゝ云々さきをだうけずと云ハ他流のごとく鉄を長く打の
たるを箸のさきに入と云也釘のやうなる形を箸のさき
に入と云釘のぬく短きを箸の先に入事をいふなり

一膳を上古ハ山にて神代にハ山の葉を用
ゐて酒なども山にその葉をくゝれ山にて

と云也二條亞相記ニ或人の云膳を訓じて加之波手といふまゝ
古ハ柏葉を用て飲食を盛る故ニ加之波手と名ぢく云〻
又伊勢の神事ハ時ニ〻のかしはとて大なるかしわの葉可
神酒をそゝぎて風ろの司これをいゝぐきのむるあり此事
夫木抄ニ鴨長明が伊勢記を引てあるせる異國にも日本
すてかしわの葉ニ飲食をあるを関係〻北史ニ書奏
九十四ニ日本の風俗を記しるすに俗無盤俎藉以槲葉と
見えあり盤俎ハ食物を載る器の事槲ハかしわの木也
一土器の代ニ磁器を用ること三光院内府記云木具土器面
向之桑會會席祝儀ハ必用之歟塗物ノ器平生受用之器勿論歟皆朱之上貳有歟或
無紋漆箔等随所各用青甕或白茶碗大臣朝夕之器也一切塗物不用之
之歟堅固内〻之儀ニ歟
道遥院称名院禁中御會桑内之時ハ自長橋局朝夕所用之
茶碗密々被召寄令受用歟キ大臣ノ規模此分ニ歟
續古事談ニ上圓融院大井河ニ行あり多ク先少井寺
乃前ニ絹屋貞丈云絹屋トハ絹ノ幕ヲ張リ四方ニシテ上ニモヤ子ノ如ク張ルナリ是ヲ幄屋ト云之
おもゝすに大入道殿攝政の時ハ膳設られ茶碗ならべられる
懸盤の事三光院内府記云平生朝夕諸家可用此盤事ハ
雖然各依無沙汰不用ハ當所受用物者一日晴テ号檜懸盤
候折捨云〻不可用之器ニハ貞丈云一日晴ト云ハ白木ニ作タルヲ云　○貞陸自筆記
云常ハ懸盤ニて糸ハ御墓掃も同前ニ仕ハ精進の時ハ
足の付ある折敷ニてきこしめハ懸盤ニてハ何も外を書漆
今ハ切足ト云

又リ盃モ後世ノ物ニ非ス大永天文ノ比記セシ貞順色〻記ニ見エタリ

清少納言枕草子ニ云かけをんと云て何よりあらんまるべし

すぬる内さバ光明朱よりぬられさるまてハ

一活(イキ)る鯉のうち移る時ハ目を紙まて張り尾を包也板(マナイタ)の上まてもて

身時ハ尾を切るゞよ〻庖丁人の秘する古実

とゝ〻〻と四条流献方口伝書すん〻〻

一藻(モ)分塩(シホ)分と云板の上まてもて不作(ミヨサ)あり先藻分と云ハ庖丁

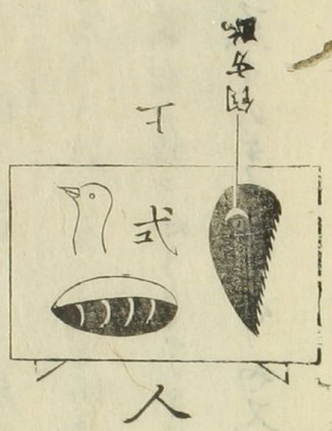
まて魚をおでるまゝ塩分とい庖丁まて魚を指(ナデ)る間也奪(タカノトリ)

何方(カヒカタ)をおろし何方を上〻〻と式(シキ)より上の方〻〻〻右の方ま

魚之首(クビ)ハ左之余(ヨ)の形(ミ)ハ下の方〻〻魚之射鳥矢(イトリヤメ)目を黄楊(ミヤウチウ)

〻て奪の鳥の何方の下〻おすゝ

四条流献方口伝書之図



一心葉(ココロバ)の事右同書ゟ云袋膳(キヤウゼン)の四方ゟ多まて松葉ゟ梅などを作て

之ゟ多ゟ是を心葉と云〻〻云し中院大納言通茂ゟ七十賀記

ゟ之多人饗赤木机中畧心葉松と云〻あり机ハ食盤ノ如シ其四方松ノ作枝ヲ立ルヲ云

一様器(ヤウキ)の事源氏物語ゟ云ゟ〻ねのやうき法ゟ〻〻〻〻〻

細流抄ゟ〻ゟきハ盤の事也〻〻孟津抄ゟ銀の楊器也或〻

藥器の盤也四方の膳などの事所説一説ぬすゝ朱器と

いひ白木を楊器（ヤウキ）と云引入多り至徳記よりの
見あり所説とハ異 形恕菴の説あり
也上北村季吟が源氏湖月抄より
真丈按ふ盤の多くハ柏也と云ハ折敷の形と
ゆの藥器の盤と云ハ茅をうけあるべき柏の折敷類の柏也
閑伊又白木を楊器と云引入也と云ハ白木の杉葉の形にて
いろ〳〵入あり組ある柏と呼四ぬ法説さらにあらず又中
院通茂卿七十賀元禄十三年記ふ折敷三枚 稼器盃 蝶鳥 又折敷一
枚 稼器 瓶子一口 稼瓶 と見あり楊器とも稼瓶とも書也源
氏まきろの稼の条うきと有るハ銀にて楊器の形を作りたる柏
と呼也白ろ稼のやうき形なるのはさらつきとあるをられハやう
きハ盃をのせる皿と呼也又按楊も稼も呼名を用ひる

楊の字本ンあらん欤常ハ折敷類ハ檜（ヒノキ）にて作るを是ハ楊（ヤナギ）
の木にて作りて楊瓶と名付る礼 檜にて作る形を捨ル
と云歌の名ろ藥瓶（ヤウキ）といふ説ハ誤（アヤマリ）有る歟